

## 創立 40 周年記念誌より <校名改称問題>

昭和 12 年卒業生 森 弘毅 様

大正 12 年の関東大震災で被害を受けて、その復興の芽が伸びようとする東京市の中心地、京橋区（京橋高等小学校内）において、翌 13 年 5 月、産声を上げたのが東京市立京橋商業学校である。私が入学した芝公園 4 号地の旧校舎に移転するまで、明石尋常小学校、明石埋立地と転々し、発祥地を知らない悲しさで、一向に懐かしさがわからない。しかし芝公園の旧校舎についての数々の思い出はあり、そのおもなものを思い出すままに記していく。

- 芝増上寺の近くで、学園としては申し分ない土地柄であるが、校舎と校庭が狭かったこと。
- 仮校舎であって、壁が中空であったので、俗に煙突校舎と呼ばれ、防火訓練の際によくこの俗称を聞かされたこと。
- 第一本科（中間部）の生徒は、制帽に白線一本がついており、よく目立ったこと。
- 岩井海岸に初めての臨海寮が出来て、一年生は全員参加し、全校皆泳という教育が徹底したこと。
- 昭和 7 年度から入学定員が 4 学級 200 名となり、入試時期は 2 月末で、公立中学校より前に試験が行われ、競争率も比較的厳しかったこと。（この時代はいわゆる昭和初期の不景気で、上級学校進学者も比較的少なく、実業学校に社会的魅力があったので、（旧制）中学校よりも先に入試が行われたようだ）

40 周年記念に当たって、特に記しておきたいことは、私が入学したころから卒業後数年間にわたって起きた「校名改称問題」である。芝公園に校舎があるのに、校名は相変わらず「東京市立京橋商業学校」であることが変に聞こえるようだが、在学中さほど気にもならなかった。伝統を意識していたためであろうが、いわゆる発祥の地の名称に愛着を感じ、かつ諸先生方の薫陶よろしきを得た上に、諸先輩方の並々なら

ぬご努力の賜物で、天下にその名が認められていたからである。在学中、東京府立一商、三商に倣って「東京市立第一商業学校」にするという声もあったが、当時の東京市教育局の方針で、中学校は番号方式、実業学校は属地方式となっていたので実現しなかった。

その後、昭和 14 年 1 月、4 月 1 日より校地移転並びに校名京橋を「芝」と改称することが官報に公布され、校名改称について一大運動が行われることになった。

現喬松会会長田口助太郎氏などが先頭に立って、母校の校名維持に連日連夜、当局との折衝に心血を注いだことが強く脳裏に刻まれている。ある先輩は初志貫徹の意味で「血書」までしたためたほどであった。この時の主張は青山の地を退いた青山師範学校が世田谷区の新校地に移っても、「青山師範」を唱え、大塚に移った「お茶の水」（女高師）の例を挙げたと記憶している。

そこで、京橋にできる新しい学校は、「京橋商業」と称さないという紳士協約を結んで、現在地に芝商業高等学校として明日の発展を期したのである。母校を懐かしむ先輩の心の宿は、ここに同窓会の名称を「喬松会京商会」となって永遠に発展することであろう。